

●白馬會の回顧(三)

黒田清輝氏談

▲白馬會の原由^{もと}

それで如何してもマア色の薄い濃いと云ふ事は其國柄にも據るし其人にも據るし何處が佳いと云ふ事はない話なんです、其人の好みと云ふ點があるんですから、それですけれども何うしても少し自然の研究と云ふものが足りない^ふと云ふ事を非常に感じたんですね、それで私共は先づ人の事は兎も角も自分丈けハ繪を書く^くと云ふ事に就いてハ境遇が面白くなくてハ可けない、それで研究すると云ふ事に就いては第一に自然と首つ引きでなくては可けない、是から幾らか技術の發達を計るのにハ友達の間^まに遠慮があつてハ可けない、それ丈けを必要と心得たのです、それで此時機にあつて共にやらうと云ふ人が集つたのが即ち白馬會の因となつたので白馬會の展覽會と云ふのハ即ち其結果であるのです

▲種々^{いろいろ}違つた畫風

それで能く此事情が判らない人ハ或は畫風に一種の僻があつて其僻を持つた人などが寄つたと云ふものがあるか判りませんけれども畫風があつて寄合つたんぢやないんです、それですから會員の中にも皆種々違つた畫風の人も交つて居りますから言はゞ黒みを澤山使つて私共が前に感じて古風だと思つたのをやる人もありますし又ハ如^さ其でない人もあります、それから畫題の選み方なども不幸にして死んだ今泉と云ふ男などハポンチのやうなもの

を題にして書いた男なんです、又會員の中でハ全で繪など畫かない人もありまして唯だ惡口を云ふ人もあるんです、其惡口と云ふのハ何ですね、友達の中に勝手な事を云ふのなんですね、如其いふのハ非常に益友なんですね

▲墮落しない豫防策

それで先づ白馬會と云ふ一つの小さいなりにも團體見たやうなものが出来て今の主義で推し移つて行くに就いてハ平常友達を訪ね彼れ是れ云ふのハ出来ないのですから一の研究場所を拵へて平常幾らか研究もする、其研究と云ふのハ重に人牀に就いての研究なんです、それが私共も非常にむづかしい事に思つたと云ふのハ一葉の油畫と云ふが人間を畫くと云ふ事に研究が足らないでハないかと云ふ感じがあつたのと元來日本の畫に是が欠けて居たと油畫で人間の繪を畫いて少し形が出来ると満足すると云ふ風がありますから其點に落ち込んで行かない豫防策であつたんです、それで其左様いふ所が出来たものですから書生の稽古したいと云ふ者があつて同じ事ですから研究すると云ふ事にしたのですね、初めハ天真道場と云ふ名を附けたのです、マア自然を基にしてやると云ふので始めたのです、それが今日になつて漸次^{だんく}二ヶ所も三ヶ所もやるやうになつてますけれども今日でハ元研究しやうと云つたものハ今ハ監督なり指圖なりをする丈けに止つて自分の研究と云ふ事ハマアなくなつて了つたんです、今の所ぢや研究所と云ふものと白馬會と云ふものとハ別物で會員の暢氣な寄合ハ牛井會の方でやりまして研究の方ハ研究所へ任して了つたんです(をほり)

黒田氏の談は之に盡きざれども本紙發行停止中、白馬會は既に閉會せしを以て茲に尾を結ぶ事とす(一記者)

『都新聞』明治三十八年二月一日